

米中接近、中国の国連参加、日中国交
そしてベトナム和平と動いたアジアの
国際環境の大きな変動のなかで、アジ
ア諸国は、揺さぶる「中国の影」と格闘し
ながら今日にいたっている。

こうしたなかで、インドネシア、マレ
ーシア、シンガポール、タイ、フィリピン
から成る ASEAN (東南アジア諸国
連合) 諸国が、

新しいリーマン
ナリズム (地域

中国情報

中嶋 嶺 雄

主義に基盤を
おいた、現実主
義的存中文化構

想をかかげている問題を提起している
のは、そうした新しい国際環境に自主的
に対応しようとするアジア諸国の動きに
ほかならない。

しかし、こうした新しい国際環境対応に
もかかわらず、国内の民主化がそれに追
いつかない場合、今回のタイにおける学
生運動の爆發のような事態が生ずる。

の意味でタイの今回の政変は、「一種の
「市民革命」」的性質を帯びたものであ
り、インストレトに体制変革を目指すもの
ではなかったといえよう。

従って、今回のタイの学生運動が、北
部タイやマレーシアとの国境地域に存在
する毛沢東型ゲリラ革命の勢力と結びつ
く可能性はきわめて薄く見ねばならない。

そもそも、戦後のアジアは、理論的に
は毛沢東型革命が最も成功しやす

アジア諸国と「中国の影」

揺れ動くたび大きな傷

主義にあおるにわかかわらず、そして、毛
沢東型革命勢力が現に存在しているだけ、こ
れにたいする中国の有形無形の支援をもつ
ついでにまたにもかかわらず、毛沢東型革
命がアジアで最も成功した例がないの
はなぜなのか。

革命勢力にたいする強圧が厳しいもの
であることは、いまでもないが、より
根本的には、タイのゲリラやマレーシ
ア、インドネシアのゲリラ、そして、フィ
リピンの新人民軍 (地下共産党) の推挙組

態などに見られるように、これらの革
命勢力がひたすら「毛沢東思想」をかか
けて、中国共産党の「お墨付き」を求め
ることを競い合っている。もし、これは
その革命勢力の指導者が中国人 (マレ
シアの「幻の共産党」指導者、陳平) の
代表的な存在であるならば、その理
由がある。つまり、中国の「影」にた
元「中国の影」におおわれ、華僑社会が
大きな社会的、特権層を形成している
アジア諸国にあって、右のような事実

は、中国にたい
する新威をもち
がうしでも華人
にたいしては現
在もあつても、現
地のアジア諸国
の民衆をどうえ
るかについては決
してならないという根本問題がここにあ
るのだ。

しかも、アジア諸国は一九六五年のイ
ンドネシア 9・30クーデター事件や文革
期のビルマを他にたいする一連反外
交をかえりみずまでもなく、中国の対
外政策が揺れ動くたびに大きな傷を受け
てきた。これらすべてが、中国こそ「影
にたいして、アジア諸国が、純真に、対
応できない理由なのである。

(東京外大助教)